

郎も村会議員や農地委員の長老として活躍した。最近では故南川清一剣道七段（九十歳で没）がいた。大正の初期以来実に六十数年にわたり剣道一途に、現職を退いても自宅の小屋や庭先を武道場として、後輩の指南と指導に精進した。

下古賀における従来の戸数は四十二戸、明治四十年の頃は三十戸内外であったが漸次に増加した。それに加えて近年町営住宅がこの地区に建設され、昭和五十三年に二十四世帯（二棟建）が五十四年にも更に一棟が完成して、人口も一挙に一四〇名の増加となった。この住宅に住む人の条件としては、元から東与賀在住者に関係ある人で町内の因縁関係者が多い。かくて現在の世帯数は従前の二倍を超えて八八世帯にふくれ上がった。居住者の職業も変動して、サービスマンが最高で二〇、次いで建設業一八、その次に農家が一四となり、その他卸小売・公務員・運輸通信・製造業等となっている。

この団地居住者では、公務員はじめ会社・工場等の勤務者が多く、自家用車やバスで佐賀市内外へ通勤している。各棟毎に班長三名を任命し自治組織のもとに明るく健全な団地運営がなされている。この団地運営によって純朴平穏な東与賀の農村にも、若い人たちによる新風が吹き込まれつつあることは喜びにたえない。

下古賀村落における新旧住民の融和と親善のためには、なんとしても邑の氏神様でありも一つは公民館（集会所）である。お宮はこの村のほぼ中央に在り、さっぱりとした石造りの祠で船津のお宮から分祀されたものとの風

説がある。年記は不明であるが、神仏混交時代のものではないか。表の鳥居は明治二十六年改築したと明記されている。

このお宮の東側に最新式ともいべき集会所が建設された。これは昭和五十三年度に工事費総額一三九〇万円の巨費を投じて建築された。正式の名称は「町営住宅下古賀団地集会所」で、前記の町営住宅建設の一環として完成されたものである。この集会所で地区集會をはじめ、老人クラブ・婦人会・父兄会の外、農家の生産組合や女性グループ（大正会・昭和会）等の勉強会・子供クラブの活動等、幅広く利用され活用されている。

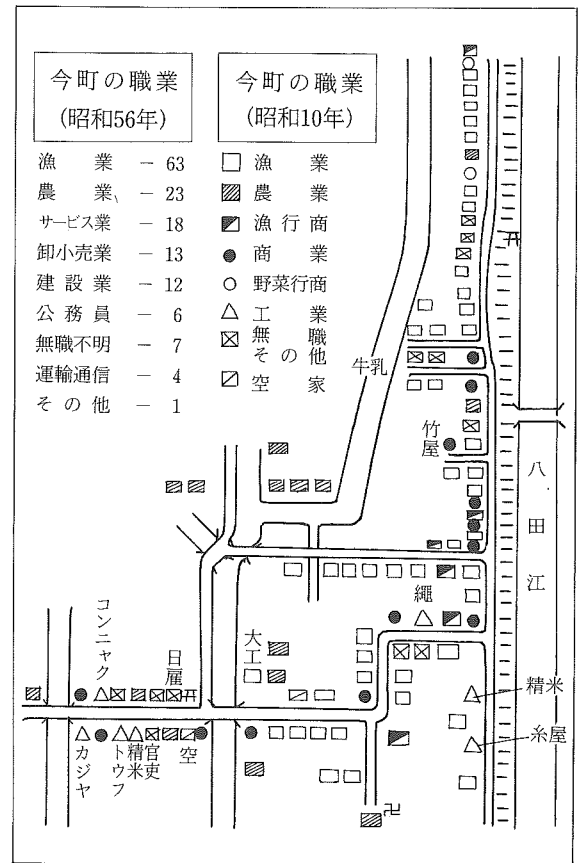
村落の事業としてはお宮と集会所を中心に和やかに楽しく、次のことが行われている。大般若経は毎年二月十一日（建国記念日）当番の家で開催する。祇園は八月一日、大祭と小祭は十月十七日と十一月二十五日に二組に分かれて施行する。川神祭は五月五日の男の節句であるが、一カ里と南小路と北小路の三班に分かれて行う。こも藁舟を作り堀に流して子供の水難予防と河川に対する感謝を捧げるのである。お供日は十月祭りとして、赤飯祭りは当番の番帳さん宅で盛大に挙行する。かくて時代は移り世の中は変わっていくが、農村の麗しい伝統行事は毎年毎年引き継がれ受け継がれて、現在にもなお生きているのである。

## 町 七 今 町

今 町は東与賀町の東部を流れる八田江に沿って栄えた町で、東は川を隔てて川副町広江と相對し、北は船津に



町 営 住 宅 団 地



の上から、お宮が三つ祀られてある。平常は西の宮・中の宮・北の宮と呼ばれ、西の宮には天照皇太神宮・北の宮には沖仲大明神を祀り、中の宮は三界万霊を祀ってある。

西の宮は農家の餅祭り、田の豊作を祈願するものである。毎年五月二十一日の苗代かきの頃と、十月十七日はその例祭である。その前番帳さんの家で紅白の餅を二斗搗き、当日早朝七時に「伊勢皇太神宮」と書いた旗を立てて戸主がお供しご馳走の行列をつくり、お宮に集まるのである。定刻になると粟島神社の宮田宮司により祭典

南は梅田に隣接している。東与賀町内で町の名があるのはこの今町と上町であるが、昭和十年頃の職業別を見ると、漁業が圧倒的に多かった。これが現在の職業別と相対して如何に変化したか、約五十年間に戸数も随分増加しておりその推移進展の姿が明瞭である。

この今町には村落としての成立や地形それに各家の職業

が始まるが、祭壇には大きい紅白の餅を中心に酒肴・白餅米・赤飯・野菜・果物等が所せましとばかりに供えられている。宮司の祝詞がすむと、若者数名がお宮の屋根に登り、神に供えられた紅白の餅を参詣の人々に投げ与えるのである。何しろ二斗にも余る大小の餅を屋根上の天上から振りまくのであるから、下界で拾う人々は大賑わいである。餅拾いも上手下手があつて、多く拾う人は三十個や五十個も拾い、下手な人は僅かに二・三個、それでも拾った餅を大切に家に持ち帰り、家内中で食べて安全と五穀の豊饒を感謝するのである。

戸主は今年番帳さんの家でご馳走があり一日中楽しみ夕刻になると「番帳さん送り」といって、三味の音と共に次年度の番帳の家に行くのである。

北のお宮の沖仲大明神は漁業の神様で、数年前まで旧九月二十一日が例祭であつたが、海苔の関係で毎年九月二十日前後に改正された。このお祭り当日には、今年と来年の当番は紋付羽織に藁草履で正装し「沖仲大明神」の幟を先頭に、海の幸(魚)山の幸(ぎんなん・山芋)里の幸(くわい・いも)の五種の神饌をかついで神社へ行列する。特に来年の祭り引継者(番帳渡し)は、顔に白粉や紅や墨で面白おかしく化粧して、三味線を弾き歌いながら来年の当番の家まで行列を作っていく奇習がある。これらは素朴ながら豊かな農漁村でなければ見ることのできない昔ながらの風俗習慣である。

今町 この宮は古来今町の東北部旧堤塘の東側で旧江の西部に大明神社として、相当の広さの境内を有する社殿であつた。ところが昭和八年より二・三カ年間にわたつて、八田江の大改修が施行され、そのためにこの神殿および境内の全部を取り壊され移転のやむなきに至つた。しかし移転し新築するには過去の証明書や新築願書それに多額の経費や地所面等、種々の困難も多かつたが、当時の宮司故野田春吉をはじめ信仰心の厚い氏子総代等の努力に

よって、昭和五十年三月現在の位置に威風堂々と新築落成がなされたのである。

中の宮の祇園祭りは、大日如来、三界万霊を祀り、以前は旧八月九日が例祭であったが、今は改められて毎年七月九日である。昔からこの宮は、天然痘の神様として近隣はもちろん他の町外よりも参詣人が多かった。殊に例祭の当日は、戸主や若者連中は朝からお祭り気分、酒を飲み太鼓や三味線で大賑わいをやる。お宮の前には手踊りの舞台が掛けられ売店の茶店も各地より競って馳せ参ずる。にわか作りの出店には、子供等が最も喜ぶ風（とうばた）やおもちやが華やかに飾られ、ラムネやかき氷の赤提灯が揺れる。日が暮れて踊り舞台に電燈が灯る頃には、この町の人々はもとより村の内外から参詣する老若男女が押し寄せ、人込みで境内はいっぱい。道も通れぬほどの押し合いへし合いの人出となる。この頃になると舞台では手踊りがはずみ歌もはずんで観客を喜ばせ、出店では客を呼ぶ鐘や太鼓に喇叭や人声でお祭気分を湧き立たせて、祇園祭りは最高潮に達する。こうして毎年毎年と大賑わいが続いたが、各地より来る出店を半減する政策をとって、船津の祇園祭と同日に挙行したことも度々あった。

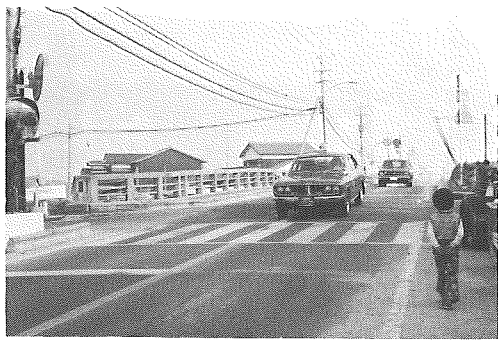
以上のお祭りの外に、「豆祇園」がある。これは毎年七月十五日西の宮に農家の戸主が各自重箱持参で集まり、神酒を戴きながら四方八方の話に談笑し、楽しむものである。子供たちは豆かお金を各家から奉加を受けてお宮に集まり、その豆を煮たりお菓子を買って食べたりして喜ぶのである。老人の婆さん連中もこぞって集まり、お茶を沸かしお菓子を味わいながら歌ったり踊ったりこの「豆祇園」を楽しい生き甲斐の一つとして余生を感謝しているのである。

この今町の最南端に古刹の円光寺がある。御本尊は阿弥陀如来で過去帳の書き初めは、寛文十二年とあるから約三百年余前のものである。寺院の周囲は深い堀に囲まれて、いわゆる「城づくり」の寺院で有名である。歴代十二世の五十嵐卓道はその子貫道と私塾を創始したり、開基の流教は布教と共にこの付近の治水事業にも努力した。その功績はこの寺院の南方約五百坪の所に、左衛門井樋の遺跡がありこれを物語っている。

今町の大きい特徴は漁民の漁業による大きい進展ぶりである。漁業の長老たる元町会議員の吉田吉郎（年齢七十二歳）は、その模様を次のように語った。

私は若い頃から小さい「あんこ船」に乗って有明海だけに止まらず、遠く朝鮮近海まで遠出をやった。初めは帆船の四・五隻であったが、だんだん船数も増し、船も改造されてエンジンによる機械船となった。捕る魚類は、グチが専門であったが、外にクチゾコ等も盛んに漁獲した。獲物がふえるとだんだん距離も遠く、鴨緑江付近や仁川あたりまで、袋網を持って航行した。出漁する時期は毎年二月上旬より五・六月にかけてが多く、梅雨の前は豪雨を警戒して帰還していた。大漁の折は大漁の旗を海風になびかせて意気揚々凱旋将軍気取りで帰ったが、途中では島原にも遊んで、若さを発散したことも今は昔語りとなってしまったのである。

町  
今  
この今町では昔から漁業青年の角力が盛んであった。漁民はいつも太陽のもとに潮風にさらされ、漁猟の重労働で筋肉も強じん、その上に暇を見ては技量を練るので力は強いはずである。昔より西方の雄大野村と



近代化した今広橋

共に東方の雄として互いに横綱格を競ったものである。往時、これらの逞しい漁業青年たちが、出場した東与賀町内での角力大会の盛況や、佐賀郡や県の角力大会更に佐賀市における佐嘉神社や護国神社祭典で活躍し優勝した勇姿は、なお町民の眼にも残っていて実に感慨も無量である。

## 八 中 割

中割は南北に流れる堀割りを境界として作出の東部に隣接しているが、行政上中割は大字下古賀に、作出は大字田中に分けられている。地名辞典によると「中割」というのは干拓や耕地整理の際の区切りのことで、「中切り」とか「中割り」という言葉からの名称である。こうして二つに区割りされた村落であるが、中割と作出は昔から密接な関連を持ち協同大和の精神で年々と繁栄している。

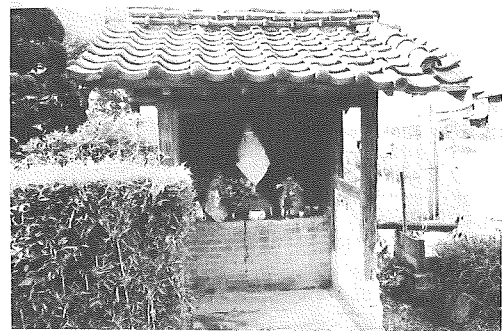
大正初年頃の本村の郷土調査では、大字下古賀の中にこの「中割」の字名が記され「作出」の字名が見当たらない。したがって「作出」の小字はその後にできたものと想像される。また中割の現在の戸数二十五戸でその半数以上が農業を営んでいるが、昔より庄屋をつとめた山田家をはじめ、宮崎・副島・吉村・園田等の旧家や地主層が多い。当時所有した水田の面積は今町や梅田付近にまで及び、それだけに敬神崇祖の念も厚かったという。

その一つに二泊三日の英彦山詣りがあるが、これは毎年四月二十五日を中心に農家の男子四人が組を作り祈願

するのである。服装も素朴な着物姿に草鞋がけで、てくてくと歩き続ける真剣な苦行であった。満願をすまして村へ帰り着くと、家族や村落民が産土神社に待ちうけており総出で歓迎をする。参詣者は英彦山からお土産に買って来た「へそぐい菓子」を村の子供たちに振る舞ったり、参詣状況の報告をする。夜ともなればその慰労を兼ねて祈願成就祝賀の権現講が催されるのである。この英彦山詣での奇習として、参詣者はいた草鞋を掃毛した際に抜がしてやり足を洗ってやると妊婦は安産するという奇習がある。往時の母親連中でそれを実行した人も多いとのことである。

も一つはこの村の東端にある三界万霊の地藏堂を忘れてはならない。

安永四年十月吉日の建立で以前は町道の東部へ突き当たりの堀岸にあったが、現在地に移転改築になったのである。お地藏さんの眉の間に大きい「いぼ」がある。「いぼ地藏さん」の愛称がある。このお地藏さんは子供授けの神として尊敬され、お詣りして子宝を恵まれた実例も多いと聞く。それでこの近隣だけでなく他の町村よりも遠くは小城の三日月からも参詣者があるとのこと。現在地は春秋の彼岸にこの地区婦人会でお祭りをする外に、毎年十月十五日のお供日がある。この日に赤飯を炊いて魚と神酒を供えてお詣りすると、見事な男の子が授かるという「霊験あらたかに有り難い「いぼ地藏さん」である。



地 蔵 堂

この邑の人々も勤労意欲旺盛で、戦前の共同炊事や戦後の副業奨励に